

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 2 日現在

機関番号： 32686
 研究種目： 基盤研究（B）海外
 研究期間： 2010～2012
 課題番号： 22401018
 研究課題名（和文） マヤ民族文化における世界観と時間思想の調査研究
 研究課題名（英文） A Study of the World View and Thought of Time in Contemporary Mayan Culture

研究代表者

実松 克義（SANEMATSU KATSUYOSHI）
 立教大学 異文化コミュニケーション学部・教授
 研究者番号： 40226030

研究成果の概要（和文）：マヤ民族文化の世界観において最も重要な要素はマヤのカレンダー—とりわけ神聖暦—とその時間思想である。マヤの時間思想はその本質である「ナワール」にあるが、マヤ人にとって、時間とは、生命の火、エネルギー、叡智、サイクル、また歴史を意味する。時間によって世界と生命は創造され、また刷新され、絶えざる維持発展を遂げるものである。

研究成果の概要（英文）：The most important element in Maya's worldview are Mayan calendars, especially the sacred calendar, and their thought of time. The Mayan thought of time consists in its essence "Nahaul", and for the Maya time means fire of life, energy, wisdom, cycles, and history. By time the world and life are created and renewed, and continue existing and developing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	4,700,000	1,410,000	6,110,000

研究分野：人文学 A

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：マヤ文化、神聖暦、長期計算法、時間思想、思想史

1. 研究開始当初の背景

マヤ文明は世界的に有名な文明であるが、同時にまた多くの誤解を含む文明でもある。メキシコ人思想家ミゲル・レオン・ポルティージャは古代マヤの時間思想の研究で知られるが、『チラム・バラムの予言書』等のユカタンに伝わる後古典期マヤの思想に基づいて、マヤの世界観を極めて運命論的、終末論的に捉えている。その後もマヤの思想、世界観を同様のイメージで理解する人々は多

く、これは学問研究において現在も踏襲されている。

筆者は今から 20 年以上も前に現代マヤ文化について関心を持ち、グアテマラ・マヤ地域において長期間のフィールドワークを開始した。このフィールドワークはマヤ・シャーマン（アッハキツヒ）、マヤ知識人、研究者等への聞き取り調査、参与観察、文献調査を中心にしたものであるが、フィールドワークの結果判明したのは、通説とはまったく異

なり、マヤ民族の文化が極めて肯定的かつ人間性豊かな特徴を持つことであった。

このことは現存するマヤ文書によっても確かめることができる。例えばグアテマラのマヤ・キチュー族には古代マヤの世界を描いた神話『ポップ・ヴフ』が伝わっている。『ポップ・ヴフ』は複雑な構成を持っているが、その前半部分は調和的な進歩を理想とする初期マヤの世界観が反映されている。この世界観の根幹を成すのはカバウシルと呼ばれる思想である。カバウシルはマヤ二元論に根差した一種の弁証法であるが、その展開はあくまで調和的である。

こうした初期マヤ、あるいは古典期マヤの世界観、思想に関する研究がまったく存在しないわけではない。フランス民族学者ラファエル・ジラルドは半世紀以上も前に『ポップ・ヴフ』におけるマヤ宗教文化の世界観、思想についての優れた研究を残している。また最近ではバーバラ・テドロック、デニス・テドロック等による現代マヤ文化の人類学的研究も存在する。さらにはマヤ・キチューの言語学者アドリアン・イネス・チャベス、哲学者ビクトリアーノ・アルバレス・フアレス等マヤ人研究者による優れた言語学的、あるいは神話研究も現れるに至っている。

しかしこれらの研究は一例を除いてはマヤ伝統文化、マヤ神話についての優れた研究ではあるが、マヤの精神文化を歴史の中で再構築する試みではない。対照的に筆者の意図は現代マヤ文化、思想を古代マヤ文明と接合し、より大きな歴史的視野で俯瞰するという試みであった。すでに筆者は前述のフィールドワークに基づいて刊行した『マヤ文明聖なる時間の書—現代マヤ・シャーマンとの対話』及び『マヤ文明 新たなる真実—解読された古代マヤ神話『ポップ・ヴフ』』の中で、現代マヤの宗教思想を歴史的視野の中で考察し、不十分ながらも現在と過去を同一文化の連続体として関連付ける作業を行った。

2. 研究の目的

以上の経緯を踏まえて、本研究はマヤ民族文化における世界観とそこに含まれる時間思想を考察し、その本質を歴史的視野の中で明らかにしようとしたものである。現代マヤ文化においてマヤの世界観と思想をもっともよく表しているものとして、マヤのカレンダー及びマヤ神話がある。本研究ではこの二つを基盤に現地フィールドワークを実施し、さらに文献調査を加えて、マヤの世界観とその根本思想を明らかにしようとした。とりわけマヤのカレンダーを分析してその時間思

想の本質を考察し、それがマヤの世界観においていかなる重要性を持つのかを確定しようと考えた。またマヤの思想は弁証法的傾向を持っていて、肯定的かつ調和的なものであるが、本研究においてそれを実証的に証明したいと考えた。最後にこうしたマヤの世界観、思想をマヤ文化における歴史的展開として考察し、解明しようとした。

3. 研究の方法

本研究の方法論は極めて実証的なものである。情報収集の主な手段としてフィールドワーク（現地調査）を実施した。同時にまた、それを補完するための広範な文献調査を行った。最後に得られたデータの分析を周到に行った上で、マヤ文化の本質に関して総合的な考察を行い、最終結論を導いた。

(1) フィールドワーク

2010年8月～9月にかけて、約3週間半メキシコ共和国、グアテマラ共和国に滞在して、メキシコ、マヤ・ユカタン文化、チアパス文化、及びグアテマラ、マヤ・キチュー文化の現地調査を行った。2011年8月～9月にかけて、約一か月グアテマラ共和国に滞在し、マヤ・キチュー文化、ツトゥヒル文化、 Choltei文化等を調査した。また2012年8月に約3週間グアテマラ共和国に滞在し、キチュー文化、ケクチ文化等の調査を行った。

調査は現地研究者、知識人、シャーマン等への聞き取り調査、また儀式、祝祭、集会等への参与観察を中心としたが、状況に応じて柔軟に対処した。使用言語はスペイン語、及びマヤ・キチュー語その他である。

(2) 文献調査

2011年1月にアメリカ合衆国 UCLA 図書館において、及び同年9月にカンサス大学図書館において、集中的な文献調査を実施した。また日本においては、立教大学図書館、国立国会図書館、オンライン・データベース、Google Scholar 等を利用して文献調査を行った。

文献調査では、古典的著作、研究と同時に最新の研究成果、情報を参照し、マヤ文化の本質を正確に把握すると同時に、現在の時点でマヤ研究がどこまで進んでいるのかを把握しようとした。

4. 研究成果

以下に本研究の主な研究成果を要約する。

(1) マヤ民族文化の世界観について

マヤ民族文化の世界観を表している重要なシンボル、哲学思想に、①マヤの十字架と②マヤ二元論カバウシルの思想がある。

① マヤの十字架

マヤの世界観の代表的なシンボルである「マヤの十字架」の原型は世界樹、宇宙樹と呼ばれるものである。その名の通り、樹木信仰から発生したものであると思われるが、古代マヤにおいては生命の源泉を表す「生命の樹」であった。メキシコの先古典期遺跡イサパの石碑5に描かれた生命の樹はその代表的なものである。世界のすべては、動物も、植物も、人間もまた、この樹によって創造される。生命の樹はその後古典期において発展し、マヤの十字架として様式化され、マヤの世界観を表象するものとなった。例えば、パレンケ遺跡の十字架の神殿等にみられる十字架は、王国の豊穰、王の力、権威を表すシンボルとして描かれている。現在のマヤ文化におけるマヤの十字架はさらにシンボル化され、十字架の四つの腕は東西南北を表し、それぞれ東（赤）、西（黒）、北（白）、南（黄色）に塗られている。これらはそれぞれ東（太陽、血、エネルギー）、西（死、冥界）、北（神、叡智）、南（人間、病気）を意味する。マヤの十字架は、世界の四大要素、あるいは二元論を意味する表象である。言い換えれば、この十字架は世界そのものを表象しているのである。マヤのシャーマン、アッハキツヒは儀式を行う時マヤの祭壇を作るが、これはマヤの十字架を表象している。

②カバウルの思想

マヤの世界観の特徴として顕著な二元論的傾向がある。このマヤ二元論はカバウルのとも呼ばれる。カバウル (Kabawil) はマヤ・キチュー語で「二つ (Keb) のヴィジョン (Wil)」という意味だが、一種の弁証法とも呼べる思想である。カバウルは、一言で言えば、「二つの異質な存在による創造」という原理である。カバウルの原理は古くはマヤ神話に起源を持つ。マヤ・キチュー神話『ポップ・ヴフ』の登場人物の大半は対の存在である。最高神テペウ (男神) とグックマツ (女神)、創造神ツァコル (建設者) とピトル (形成者)、双子の英雄フナブ (兄) とイシュバランケ (妹) などである。現在でもカバウルはマヤ文化のいたるところにみられる。例えばグアテマラ・マヤのシャーマンは占いや説明をする時よくトウモロコシの粒を使うが、その時必ず二粒をセットにする。これはカバウルのためで、二、あるいは対の存在 (ペア) はすべての基本単位なのである。また人間の諸問題を語る時に、よく肯定 (エネルギー) と否定 (エネルギー) という表現を使う。人間はたえず両者の間で揺れ動く存在である。だからその間でバランス、調和を保つことが重要になる。こうしたことから筆者はカバウルを調和の弁証法と名付けた。

マヤの十字架、カバウルの思想はマヤの世界観を表す重要な文化伝統であるが、マヤの世界観を最もよく表しているのはやはりマヤのカレンダーである。そこに存在するマヤの時間思想は世界でも類例のないもので、マヤ文化を決定的に特徴付けるものである。以下に、マヤのカレンダーとその時間思想について研究結果を要約する。

(2)マヤ長期計算法、マヤ太陽暦、及びマヤ神聖暦

古代マヤ人は多くのカレンダーを製作したが、その中で、マヤ長期計算法、マヤ太陽暦、及びマヤ神聖暦の三つが最も重要なものである。このうちマヤ長期計算法はもはや現代マヤ文化では使用されていないが、古代マヤ文明への現代人の関心から近年世界中で注目されている。2012年12月21日にその大周期 (13バクトゥン) が終了し、このカレンダーは刷新された。これはマヤの予言として世界の滅亡と結び付けてニュースになったため、アメリカなどでパニックを引き起こした。もちろん根も葉もないことであるが、現代人の危機意識とともに、マヤに対する誤解が依然として根強いことを証明したことになる。5126年という長期計算法の長大な周期が何を意味するのか、このカレンダーがいかなる目的で作られたのかは完全にはわかっていない。唯一わかっているのは、この長期暦の成立が古代の政治機構、王権の確立と強い関連を持つことである。

マヤ太陽暦、神聖暦の両者は現在でも (グアテマラ) マヤ社会の中で使用されている。太陽暦はすでに多くの地域では忘れられた存在であるが、かつてはマヤ全域で使われていた。一年というその周期からみて、このカレンダーが季節の循環を示す農業暦として発生したのは間違いない。現在でもグアテマラ、マヤ・キチュー地方を中心に使われているが、主に季節ごとの農事を示す農業暦としての役割を持っている。しかしそれだけではなく、より積極的に一年の節目に行われる、社会的行事、あるいは政治的式典等にも使われたと思われる。さらに太陽暦にはまた宗教的な意味も存在する。一年 (365日) というサイクルに存在する時間のスピリットである。現在でもモモステナンゴ文化においては年神マムが存在し、その年の統括者として、人々に大きな精神的、社会的影響を与えている。

太陽暦、神聖暦の二つは併用されるが、とりわけ重要なのは260日周期の神聖暦の方である。この宗教的目的に使用される神聖暦の根幹は20ナワールと呼ばれる20個の時間 (日) のスピリットである。ナワールとは、言わば、時間の神のようなもので、それによって世界が存在している。言い換えれば、こ

の 20 人の神が毎日交代で宇宙を統括することによって、世界は維持され、生命は生き続けることができる。以下にナワール及びその意味を羅列する。

20 ナワール：	主な意味：
1. バッツ	より糸、始まり
2. エー	道、運命
3. アッハ	トウモロコシの茎、子供
4. イッシュ	大地、山々
5. ツイキン	鳥、お金
6. アハマック	祖父たち、死者たち
7. ノッホ	知恵、靈性
8. テイハッシュ	苦しみ、悲しみ
9. カウーク	雨、守護靈
10. アッハプ	太陽、説教者
11. イモッシュ	水、争い
12. イック	空気、世界
13. アカバル	曙光、暗さ
14. カット	火、正義
15. カン	蛇、大地
16. カメー	死、再生
17. キエツヒ	鹿、労働
18. カニール	種蒔き、食べ物
19. トッホ	病気、罰
20. ツイ	犬、不倫

これらのナワールは 1～13 までのエネルギーを持つ。その進行は例えば 8 バッツ、9 エー、10 アッハ、11 イッシュ、12 ツイキン、13 アハマックと進み、その後 1 ノッホ、2 テイハッシュ、3 カウークというように続く。神聖暦はこの 20 ナワールが 13 サイクルして終了する。その周期は 260 日である。ここで 20 は男性数、13 は女性数であり、それを積算した 260 は女性の妊娠期間を象徴している。したがって神聖暦は人間の誕生、生命の神秘を表象している。この神聖暦もまたその起源は農業暦であったと思われる。何故ならこのカレンダーはおそらくはグアテマラ太平洋岸～メキシコ南西部の先古典期遺跡イサパー帯で最初に現れたが、この地域において太陽が南下して再び北上する期間が 260 日であるからである。この時（5 月 1 日）に雨季が始まり、トウモロコシの種蒔きが行われる。マヤのシャーマン、アッハキツヒは神聖暦を使って様々な仕事、治療、祈祷、予言等を行う。マヤ神聖暦はマヤ文化の「聖書」のような存在である。

(3) マヤ時間思想

マヤ語には日本語の「時間」、英語の「Time」、スペイン語の「Tiempo」と同義の語彙は存在しない。しかし「キツヒ」(K' ij、キチュー語)、「キン」(Kin、ユカテク語)という語彙があり、日、太陽、光等を意味するが、これが表面的には「時間」に相当する。マヤの

シャーマンをアッハキツヒ (Aj K' ij、キチュー語)、アーキン (Ah Kin、ユカテク語) と言うが、これは「日を数える人」、「光を導く人」という意味で、つまり「時間を管理する人」ということになる。

さてキツヒ、キンはただの物理的な日ではなく、そこにはその本質であるスピリットが宿る。このスピリットを「ナワール」(Nahaul) と言う。ナワールは時間のスピリットであるが、同時にまた知恵、叡智という意味にもなる。マヤ神聖暦は 20 ナワールから構成されるが、これらのスピリットは世界と生命を維持発展させる究極の力である。その意味で、マヤ語において、真の意味で「時間」に相当する概念は「ナワール」であると言ってもよいだろう。

ではマヤ人にとって時間とは何か。マヤの時間にはいくつかの重要な側面がある。

① 生命の火としての時間

モステナゴの伝統においては、人間は生まれる時、生命の火を持って誕生する。この火は生きている間燃え続け、死とともに消える。ここでは時間は生命（あるいはその源）と同義である。この生命の火はマヤ・キチュー神話『ポップ・ヴフ』の中にも、「ピソム・カッカ' アル」（「包まれた火」という意味）として描かれている。また現代グアテマラのマヤ・シャーマニズムには 260 個の赤いピトの木の実が入った「ツイッテ」という神具が存在するが、これは生命の火としてのナワールを表している。

② エネルギーとしての時間

時間のスピリットであるナワールの最大の特徴はそのエネルギーにある。マヤのシャーマンは異口同音にナワールはエネルギーであると言う。実際に、彼らはこのナワールのエネルギーを使って、治療や祈祷、その他の仕事を行う。言い換えれば、マヤ文化においては、「時間」とはエネルギーなのである。そうした根源エネルギーとして、20 ナワールは毎日交代で世界と生命を統括し、維持発展させている。

③ 叡智としての時間

ナワールはまた知恵、叡智という意味でもある。ナワールの語源はクナワッシュ (K' nahaux、知る) という動詞で、ナワールはその名詞形である。20 ナワールは 20 個の時間のスピリットであるが、それぞれのスピリットは独自の意味と性格を持っていて、全体で人間あるいは宇宙の曼荼羅を形成している。つまりこれはマヤ文化の知識システム、知の体系である。この体系は極めて実践的なものであり、人々に生きるための指針を与える。その意味で 20 ナワールはマヤの叡智が凝縮されている「倫理法典」でもある。

④ サイクルとしての時間

古代マヤ人は自然現象の中に無数の異な

るサイクル（周期）が存在することに気付いた。自然は絶えず流動し、変遷している。したがって時間とはサイクルでもある。マヤ人はこのサイクルに大きな関心を持ち、様々な周期のカレンダーを作成した。主なサイクルを羅列すると、1日（キツヒ）、13日（レカンキツヒ）、20日（ウイナル）、260日（ソルキツヒ、神聖暦）、360日（トゥン）、365日（太陽暦）、4年（マム）、52年（カトゥン）、260年（カトゥノブ）、1040年、5200年、5126年（長期計算法 13 バクトゥン）等である。これらのサイクルはまた相互に関連している。これをカレンダー・ラウンドと言う。

(4) マヤ神話

スペイン人征服者、カトリック修道士がマヤの文書を破壊したため、現在に伝わるマヤ文書は少ない。その一つマヤ・キチュー神話『ポップ・ヴフ (Pop Wuj)』は 18 世紀初頭にチチカステナンゴに赴任したスペイン人修道士フランシスコ・ヒメネスによって発見されたが、古代マヤの歴史、思想を知る貴重な資料である。この神話は当初『チチカステナンゴ文書』と呼ばれていたが、19 世紀にこの神話をフランス語に訳した修道士シャルル・エティアン・ブラシュール・ドゥ・ブルブルが『ポボル・ヴフ』と名付けたため、その後この名前が定着していた。しかし近年キチュー人言語学者アドリアン・イネス・チャベスによって『ポップ・ヴフ』（聖なる時間の書）と正しく修正され、グアテマラ・マヤのシャーマン、知識人の間ではこの名前と呼ばれている。『ポップ・ヴフ』は創世神話であるが、同時にまた詩であり文学であり、さらには歴史書、思想書でもある。この神話の周到な解読の結果、それがマヤ古代の歴史と思想を象徴的に語った類まれな古代文書であることが判明している。とりわけこの書はマヤの根本思想であるマヤ二元論カバウイルを体現したものであると言われる。神話の物語の登場人物の多くがカップル、双子、分業など、対になった存在であるからである。筆者は今回の研究において、この神話の内容を詳細に検討し、あらためてこのことを確認した。神話として描かれている物語は、いわばマヤ文明の精神史とでも呼べるものである。

(5) マヤ文明の精神史

神話『ポップ・ヴフ』は大別すると前半と後半に分かれる。前半では古代マヤの神話と歴史の物語が語られるが、後半はマヤ・キチュー族の神話と歴史を描写したものである。統一を欠く構成であるが、神話の解読及びその他歴史学、考古学等の補完的資料から、古代マヤの歴史とその思想を再構成することが可能である。神話の解読に基づいてマヤ文

明の精神史を要約すると以下のようになる。

第 1 の歴史時代

神話： ヲクブ・カキッシュの時代
特徴： 狩猟採集生活、迷妄と無知の時代
マヤ時代区分： 原始時代

第 2 の歴史時代

神話： シバルバーの時代
特徴： 農耕社会、暴政社会、生贄の習慣
マヤ時代区分： 黎明期

第 3 の歴史時代

神話： イシュキックの時代
特徴： 最初のマヤ文明、文明の萌芽と暴走
マヤ時代区分： 先古典期初期

第 4 の歴史時代

神話： フナプとイシュバランケの時代
特徴： 文明の成立、ことばと倫理の開花
マヤ時代区分： 先古典期中期～後期

第 5 の歴史時代

神話： キチュー族のグアテマラ帰郷
特徴： 文明の停滞と退廃、生贄の復活
マヤ時代区分： 古典期～後古典期

第 6 の歴史時代

神話： 諸部族の抗争
特徴： 文明の滅亡、狂気
マヤ時代区分： 後古典期末期

結論として、マヤ文明は社会の物質的進歩と精神的進歩の調和により成立し、またその破綻により滅亡した、ということになる。

(6) 歴史としての時間

マヤの時間概念は古代マヤ人の世界と生命への好奇心、探求心から生まれた。彼らは自然の森羅万象を注意深く観察して、そこに存在する様々な規則性、真理に気づき、またそこに生命の神秘を見出した。日のスピリット、ナワールの概念はその結晶とも言える。しかしナワールはそれだけのものではない。ナワールの内容を深化し、そこに人間社会への意味を与えているのは、マヤの歴史そのものである。20 ナワールは過去におけるマヤの歴史の異なった側面を分担して表現している。例えば、最初のナワールであるバツツはマヤ文化における時間（歴史）の始まりであり、アッハはフナプとイシュバランケがシバルバーに旅発つ前に植えた聖なるトウモロコシの茎であり、イッシュはすべての基盤である大地、山々を表し、またマヤの祭壇を意味し、イックは喉、空気を意味し、生命の根源を表している。アッハはことばと知性の象徴であり、マヤ文明の建設者、太陽神フナプであり、ティハッシュはマヤ民族の苦難と苦しみの象徴であり、カニールはトウモロコシ畑（ミルパ）を表し、マヤ文化の物質的基盤（農業）の確立を意味し、カットは法と正義を表すといった具合に、これら 20 のナワ

ールは、総体として、マヤ民族の歴史的経験、その栄光と苦難を象徴している。したがってマヤの時間とは最後にはマヤの歴史そのものであることになる。

(7)創造と刷新：マヤ時間思想の本質

以上の諸々の考察から、結論として、マヤ時間思想について何が言えるのか。マヤ時間思想の本質とは何か。

マヤの時間思想を一言で言えば、「創造と刷新」の思想であると言えよう。マヤ人は時間が根源的なエネルギーであり、世界と生命の創造者であると考えた。世界は時間のスピリット、20ナワールによって創造され、現在も維持発展し続けている。しかし創造されたものは時とともにやがて老朽化し、あるいは墮落・退廃し、秩序と生命力を失ってしまう。過去の歴史はこのことを雄弁に証明している。そこで世界と生命の刷新が必要になるのである。生命も、人間も、社会も、文化伝統も、生き延びるためには絶えず刷新されなければならない。古代マヤ人は鋭敏な歴史感覚を持った民族であった。彼らは時間が歴史の営為そのものであると考えたが、社会と文化は、それが維持発展するためには、絶えず刷新されなければならないと考えた。この刷新は多くの場合平和裏に進行して、旧秩序の再構築が行われるが、時としてそれを越えた再創造を必要とする場合もある。破壊や滅亡もまた刷新の一形態である。

またこの刷新はあくまで人間の自由意思によって実現されるものである。マヤ文明の母であるイシュキックは自らの意思で地底の暗黒帝国シバルバーを脱出し、地上に出て双子の英雄フナブとイシュバランケを生んだ。歴史を動かすものは人知を超えた運命ではない。現実を改善しようとする、よりよい社会を作ろうとする人間の努力の結果である。文明の建設者である古代マヤ人は運命論者ではなく、むしろ楽天的な進化論者であった。こうした刷新の思想は現代マヤ文化にも生きている。マヤのシャーマン、アツハキヒは儀式を行う際、マヤの十字架の祭壇を造り、それを燃やす。そしてその時世界の創造者である20ナワールに祈る。この象徴的な行為は世界と生命の刷新、またその調和の実現を意味している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①実松克義、創造と刷新—マヤ・カレンダーの時間思想とマヤ文明の精神史、立教大学ラテンアメリカ研究所所報、No. 41、2013、pp. 1-28、査読なし

②実松克義、ピソム・カッカ'アル(包まれた火)—「マヤの宇宙観」にみるマヤ思想の内容とその本質についての考察—、立教大学異文化コミュニケーション学部紀要「ことば・文化・コミュニケーション」第4号、2012、pp. 69-101、査読なし

[学会発表] (計1件)

①実松克義、創造と刷新—マヤ・カレンダーの時間思想とマヤ文明の精神史、立教大学ラテンアメリカ研究所講演会、2012. 1. 12、立教大学

[図書] (計1件)

①実松克義、マヤ民族文化における夢とヴィジョン、河東仁編『夢と幻視の宗教史』(上巻)所収、LITHON社、2012、pp. 129-166

[その他]

ホームページ等

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/arawak/latina/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

実松 克義 (SANEMATSU KATSUYOSHI)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40226030